プロミンの光

小　六

「プロミンの光」という絵がありま
す。そこには暗やみの中、両手に包ま
れた光かがやく宝のようなものがえが
かれています。その宝から一筋にのび
る金色の光の先には、人々の暮らす明
るく温かい街並みがありました。「プロ
ミンの光」は、五年生の頃に家族で訪
れた国立ハンセン病資料館のロビーに
かざられていました。

昔からおそれられてきたハンセン病
は、らい菌（きん）が皮ふと神経をおかす病気
です。ハンセン病かん者の外見と感染
へのおそれから、かん者は強制的にか
くりされたし設へ追いやられ、自由を
うばわれ、家族までもが激しい差別を
受けました。当時は「神様がばつをあ
たえた人がなる病気」「悪いことをした
人がなる病気」と言われていました。
全国で、らいかん者をなくすための
「無らい県運動」が行われ、警察官や
役人がかん者を探し出し次々に収容し
ていきました。一度りょう養所に入れ
ば、たとえ病気が治っても死ぬまで出
られませんでした。入所のとき、かん
者はふるさとの家族に迷わくをかけな
いようにと、ぎ名を使うよう求められ
ました。りょう養所には、火そう場、
納骨堂、かん禁室があり、そこでは
りょう養するどころか土木作業、すい
事洗たく、重しょうかん者の世話、亡
くなったかん者の火そう、しにょう処
理など多くの強制労働を強いられまし

た。かん者同士の結こんはとう走を防ぐために許されましたが、子どもを産み育てることは認められず、生まれてきた赤ちゃんも殺されました。プロミンという特効薬が開発され、終戦後、ハンセン病は治る病気になりましたが、強制収容や無らい県運動は続けられました。

資料館の展示には、入所者の生活の様子が分かる写真や生活用具、作業道具、治りょう器具などがありました。進行する病気でほとんどの指をなくしてしまったかん者が、食事しやすいように工夫して作られたスプーン。片手でもボタンが留められる道具、血やうみで染まり何度も使いまわされたような包帯。そして、目が見えず手の感覚もないかん者が、洗たく板で自分の手までこすり出血していることに気付かず、ひたすら労働を続ける様子などが展示されていました。職員に反こうしたりとう亡をくわだてたりしたかん者が、閉じ込められ、うえと寒さでとう死してしまう重かんぼうもありました。

私は、展示室を見学しながらだんだん気分が悪くなり、全ての展示を見ることができず、すぐにろう下に出てしまいました。展示室の空気やにおいが他とは全くちがうように感じました。病気へのおそろしさ、かん者の様子やりょう養所で行われていたことを知り、こわくて早くそこからにげ出したい気持ちになってしまいました。

今、世界は新型コロナウイルス感せんしょうと戦いながらも、その病気に

よる多くの差別も生まれています。特効薬もなく死んでしまうかもしれない病気。感染すれば家族や友達などの多くの人に迷わくをかけてしまうかもしれない。人からいやがられ、さけられてしまうかもしれない。私はあの日、資料館でこわいと感じた気持ちを思い出しました。

「こわい」という気持ちは、人に目をそらさせ、その場から立ち去らせ、見なかったこと、なかったことにさせようとします。そして、人がいったん考えることをやめてしまうと「こわい」ものが「悪い」ものへと姿を変えて、心の中に広がっていきます。やがて、自分や仲間を悪いものから守るための、差別が行われていくのです。

差別をなくすために私たちにできることは、病気についての知識と理解をもつことだと思います。こわいという気持ちに負けず、考えることをやめないことです。何が正しいのか、外に向かってあきらめずに問い続けることだと思います。「プロミンの光」にえがかれた人々の願いや希望を、たくさんの人に知ってもらい、差別について考えるきっかけにしてもらえたらと思います。